

大学院時代からの付き合い

五十嵐 仁

「会えるのは、これが最後かもしれない」と思いながら、話をしました。三カ月前に大腸がんの手術を受け、人工肛門をつけていると聞いたからです。二〇一六年一〇月一七日のことでした。場所はJR松戸駅近くの喫茶店です。水戸での講演の帰りに立ち寄るといふ電話で、ここまで出て来てくれました。実際、私が生前の佐方さんにお会いしたのは、この時が最後になりました。

初めて会ったのは大学院生の時でしたから、もう四〇年ほども昔になります。佐方さんは労働旬報社の社員で、労働運動史研究会が出していた雑誌『労働運動史研究』の編集を担当していました。

この『労働運動史研究』に私の書いた論文が載ることになり、その作業を通じて知り合うようになりました。統一戦線に関して私が書いた論文について、「このマヌーリ合うようになりました」と注文をつけられたことを覚えています。当時、共産党の論客の一人だった榊利夫さんを批判するニュアンスがあったからだと思います。バーというのとは何とかなりませんか」と注文をつけられたことを覚えています。当時、共産党の論客の一人だった榊利夫さんを批判するニュアンスがあったからだと思います。

大学院を出た後、私は法政大学大原社会問題研究所の兼任研究員となり、『社会・労働運動大年表』の制作グループの一員となりました。編集を担当されていた佐方さんと急速に親しくなったのはこのころからです。仕事が済むと飲みに行きますが、ほとんど皆勤したのは私と佐方さんだったと思います。「ちょっとしゃべりすぎですかねー」と言い訳しながら、文学論や地元での活動の様子など良く話をされていました。

私が研究所の業務として『日本労働年鑑』を担当するようになってからは、まさにコンビを組む「戦友」のような間柄になりました。校正は厳格で、再校まで赤が入ってきます。「ここまでやるか」というほど、念の入った指摘が続きました。『日本の労働組合一〇〇年』の刊行では、印刷所まで行って一緒に作業をしたものです。

ほぼ二月から四月まで、毎週水曜日に『日本労働年鑑』の編集会議があり、激論を交わしてから西八王子の「金太郎」に飲みに行きました。研究所は町田と八王子の境にある多摩キャンパスですから、松戸からよく通ったものだと感じます。付き合いも良く、帰れなくなつてわが家に泊まったこともありました。カラオケにも付き合い、歌う

のは決まって「坊がつる讃歌」です。

一緒に山にも行きました。奥多摩の山に行ったり高尾山に登ったりしたものです。「景信山はいいですよ。あそこの天ぶらとなめこ汁は最高ですね」と教えられたのも、佐方さんからでした。たいていは川崎忠文さんも一緒に、私の息子もつれて仙丈ヶ岳に登ったことは忘れられません。「いつでも出かけられるように、リュックに登山用具一式を詰めておくんですよ」、というほど山好きでした。

研究所の仲間と一緒に出かけるバスツアーにも行きました。企画を立てるのは私で、サロンのバスを予約したりお金を集めたりという事務作業は佐方さんの役目です。笹一酒造に行ったとき、たまたま新酒祭りの抽選会で当選し一升瓶をゲットしたこともありました。

山中湖近くの温泉「紅富士の湯」では、故郷・鹿児島県の弁護士さんからもらったという貴重な焼酎「森伊蔵」を持参し、忍野八海で汲んで来た名水で水割りにして飲んだこともあります。お湯割りにするとき、「まず、お湯を入れてから焼酎を入れるんですよ」と教えてくれたのも佐方さんでした。我が家の新年会で、同級生の蔵元だと言って焼酎「佐藤の黒」をいただいたこともあります。

親しみやすい性格もあって各地に友人や知己がいました。大分大学での学会に行った

とき、自治労の組合史作成でお世話になったという佐藤さんを紹介していただき、湯布院を訪問したことがあります。佐藤正人さんのオープンカーで自衛隊の日出生台演習場を案内してもらったことも忘れがたい思い出です。

このような付き合いは退職したあとにも続きました。私ども夫婦と芹澤寿良先生を交えた四人で、河津桜や昭和記念公園の花見にも行きました。「日の出つるつる温泉」や「湯楽の里」などの温泉に入り、わが家で飲み会などをやりました。クラシック音楽が好きで、芹澤先生の招待でコンサートもご一緒しました。その時は奥様も一緒です。

そんなお付き合いをこれからもできると楽しみにしていたのに、それがかなわなくなってしまうました。あの人懐こい笑顔にも、もう会えませんが。淋しさに打ちのめされ、ただ呆然とするばかりです。

（法政大学名誉教授・大原社会問題研究所名誉研究員）